

(平成30年2月26日)

第27回 赤松小三郎研究会のご報告

日時： H30. 2. 20 (火) 18:30～21:00

場所： 東京・文京シビックセンター 4F B会議室

出席者：15名

< 配布資料 >

- 資料—1 「明治初期の薩摩藩での軍事教育」 石川浩さん作成
- 資料—2 「赤松小三郎以降の政権構想・武蔵五日市の憲法草案」 沓掛忠さん作成
- 資料—3 写真「五日市憲法草案抜粋」、「千葉卓三郎顕彰碑」など 沓掛忠さん作成
- 資料—4 柳窓外史 「二十三年未来記」 沓掛忠さん
- 資料—5 表—1 明治前期の憲法諸構想 沓掛忠さん

< 回覧資料 >

- ・ 「明治初年における鹿児島藩の軍学教育」 専修大学 瀬戸口龍一
- ・ 「武蔵五日市憲法草案全文」 沓掛忠さん

< その他 > 映画「上田の風 ふたりの先生」チラシ

< 内容 >

1. 滝澤会長ご挨拶（連絡了解事項）
顧問に丸山瑛一さん、運営委員会の設置につきご了解いただく。
2. 明治初期の薩摩の軍学教育・・・石川浩さん
 - ・ 専修大学 瀬戸口龍一氏の論文「明治初年における鹿児島藩の軍学教育」を基に説明した。さらに滋賀県彦根市立図書館所蔵の「手控」の記載内容を参考にした。また、松平忠固（忠優）子女の資料は明倫会の浦辺信子氏（松平侯の末裔）からいただいた資料である。（作成は前上田市立博物館学芸員の小宮山知佐氏）
 - ・ 明治2年、3年頃、薩摩藩では全国諸藩から留学生を招き、軍事教育を実施している。名簿では全体で240名の留学生があり、その中に3名の上田藩士が含まれていた（松平協之丞・弘（忠孝）、松平鏞三郎（忠直）・・・松平忠固の子息2人、大島平四郎・・・御用人）
 - ・ 薩摩藩では元治元年（1864年）6月に「開成所」を開設した。当初、開成所は海軍・陸軍の兵法を研究する場であった。慶応2年（1866年）には「海軍所」と「陸軍操練所」の2部門を設け、「兵学校」とし、実践訓練を中心に教育した。そのため、当初の「開成所」は基礎教育機関となり、教授には、嵯峨根良吉やジョン万次郎がいた。「兵学校」総裁は田原陶吉、軍事訓練には薩摩藩

士が当たり、大隊長として桐野利秋、野津鎮雄、種田政明、篠原国幹の名前がある。

- ・使用した教科書

フランス式陸軍に関する書籍が多い。政府が明治3年10月に、陸軍はフランス式、海軍は英国式に兵制を制定したことによると思われる。「電銃操法」・・・福沢諭吉訳、ライフルの取り扱い、「野戦要務」・・・大鳥圭介訳、「兵家須知戦闘術門」・・・大村益次郎訳などがある。赤松小三郎訳の「重訂英国歩兵錬法」は見当たらない。

3. 武蔵五日市の憲法草案について・・・沓掛忠さん

- ・五日市憲法

明治初期に国会開設を求める運動の中、全国各地で起草された民間憲法草案の一つ。東京・多摩地方の五日市町（現あきる野市）で明治14年（1881年）に起草された。基本的人権が詳細に記されているのが特徴。自由権、平等権、教育権などのほか、地方自治や政治犯の死刑禁止を規定。1968年、色川大吉東京経済大学教授（当時）のグループが旧家の土蔵から発見した。

- ・八王子市、五日市町は当時、自由民権運動が盛んな地域であった。生糸、繭の商売を通じ、西洋文明の窓口であった横浜と身近に接していたことが一因であると思われる。

- ・仙台藩下級藩士の千葉卓三郎が中心となり、多くの仲間たちとの議論のなかでこの草案が生まれ、千葉が中心となりまとめた。

- ・千葉卓三郎（嘉永5年（1852年）～明治16年（1883年））は仙台藩藩校養賢堂で大槻磐溪について、12歳から17歳まで学んだとされているが、千葉卓三郎は家格が非常に低いため、養賢堂への入学はかなわず、大槻磐溪の書生として個人的に教育を受けたといわれている。（町田市立自由民権資料館の話）

- ・千葉卓三郎は武蔵国西多摩郡五日市の勸能学校（寺子屋のようなもの）に招かれた。五日市地方に自由民権運動が急速に拡大して、八王子に第一五嚶鳴社が設立され、五日市には「五日市学芸講談会」が発足し、民権運動の研究母体の結社となる。

- ・このような過程を経て、「五日市憲法草案」には、人権規定、平等権、教育を受ける権利、受けさせる義務、地方自治など現行憲法と同じか、それ以上の考え方が書き込まれている。

- ・玉虫左大夫（文政6年（1823年）～明治2年（1869年））

藩校養賢堂で藩儒斎藤真典について学んだ。非凡な才能を認められる。弘化三年（1846年）妻の死を期に、突如、藩を飛び出し、単身江戸に上り昌平黌大学頭林復斎の下僕となり、その門に入る。

万延元年（1860年）ポーハタン号に乗船し、日米修好通商条約批准のため、正使、新見豊前守正興の従者として訪米。訪米中、毎日日記をつけ、帰国後、

その時の見聞と体験をもとに「航米日録」(全8巻)を著わす。内容は福澤諭吉「西洋事情」に匹敵するといわれている。仙台藩主伊達義邦に献呈し、再度藩士として認められる。その後、江戸の仙台藩藩校順造館で仙台藩士の教育にあたった。仙台藩も玉虫左大夫を「仙台出身の識者」としてその人物・識見を認めていた。

- 東北諸藩が奥羽列藩同盟を組織したとき、藩主伊達義邦の命により玉虫は同盟の参謀となり、慶応四年三月、米沢から会津へ入り松平容保はじめ藩首脳と会談した。孤立状態の会津藩は会津藩に手を差し伸べた同盟の中心人物として玉虫に深く感謝した。
- 玉虫は奥羽列藩同盟の参謀として、東北・越後全体の戦略を練った。玉虫は米国の社会・政治制度の方がすべての人間に平等だと考えて、政治目標は米国に見習った共和政治であった。しかし、官軍の攻撃と切り崩しに奥羽列藩同盟は破れ、玉虫はその責任を負わされ自刃した。
- 玉虫は官軍に処刑されたのではなく、仙台藩の内紛により官軍を支持する勢力が実権を握り、仙台藩として官軍に恭順の意思を強く示すため切腹を命じられた。千葉卓三郎が藩校養賢堂の師として玉虫左大夫を挙げていない理由は、推測であるが、上記の経緯により、玉虫左大夫という名前を出すことを世に憚ったのではと考えられる。

以上

小山平六(62期)